



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

復活第3主日 C年 (2022年5月1日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：使徒言行録 5章 27b — 32、40b — 41 節
第二朗読：ヨハネの黙示録 5章 11 — 14 節
福音朗読：ヨハネによる福音書 21章 1 — 19 節

...

三つの朗読から

第一朗読はペトロを代表とする使徒たちが大祭司らによって捕らえられ、尋問を受けて、それに対する答えの部分です。

41 節にある「それで使徒たちは、イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜び、最高法院から出て行った」の「喜ぶ」に注目してください。新約聖書の中で、喜びはイエスとの関わりを通じて生じます。占星術の学者たちはメシアの誕生を告げる星を見て喜びます（マタ 2 章 10 節）。イエスが行う奇跡を見て人々は喜びます（ルカ 13 章 17 節）。帰ってきた息子を迎えて父親は喜び（ルカ 15 章 32 節）、死んだと思っていたイエスの復活に出会って弟子たちも喜びます（ヨハ 20 章 20 節）。「希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい」（ロマ 12 章 12 節）、「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。」（フィリ 4 章 4 節）とパウロが勧め、励ますのは、イエスとの関わりの中で喜びを得ることを意味しているのです。イエスの復活の証人として、イエスの名の故に辱めを受けた使徒たちは、イエスとの深い関わりの中に入れていただいたことで、大きな喜びを味わうのです。

第二朗読ですが、『黙示録』で 5 章は「屠られた小羊」への賛美の箇所となります。その冒頭に「玉座に座っておられる方の右の手に巻物」があったと記されています。そして、「封印を解いて、この巻物を開くのにふさわしい者はだれか」と天使の声がします。しかし、巻物を開き、それを見ることのできる者は一人もいませんでした。それから、「小羊は進み出て、玉座に座っておられる方の右の手から、巻物を受け取り」ます。その小羊は「巻物を受け取り、その封印を開くのにふさわしい方です」と「新しい歌」が歌われます。

13 節で「玉座に座っておられる方と小羊とに、賛美、誉れ、栄光、そして権力が、世々限りなくありますように」と天使たちが賛美の声をあげます。この声は地上の教会のわたしたちの賛美の声と重なっていきます。「長老たちはひれ伏して礼拝した」（14 節）とありますが、「礼拝する」の元々の意味は「前に」プロ+「接吻する」キュネオーだそうです。誰かの前にひれ伏してその足、その衣のふち、地面な

どに接吻すること。礼拝する主体が天使たちだけでなく、天の玉座を取り囲む長老たちにも広げられている点は興味深いです。

福音朗読ですが、『ヨハネによる福音書』21章からです。この箇所はガリラヤでのイエスの出現と、それに関する出来事を記述しています。おそらく、ヨハネの弟子たちであった編集者があとから聞いたことを書き加えたと考えられています。

4節に注目してください。岸に戻ってきた夜明け頃、イエスさまが岸に立っていますが、それが分かりません。他の復活のイエスさまが現れた物語と同じです(湖上の顕現：マコ6章49節、マグダラの MARIA への顕現：マコ20章14節、エマオへの道での顕現：ルカ24章16節、パウロへの顕現：使9章5節)。復活したイエスさまを知ることが出来るのは、イエスとの関わりの中でなされることを意味しています。復活したイエスは霊的な人格ですから、復活したイエスからの語りかけ、あるいは何らかの働きかけを通じて分かるのです。そこで次の節の「子たちよ、何か食べる物があるか」が生きてきます。舟はまだ岸についてはいないのでしょうか。岸の方からイエスさまが語りかけられるのです。ちなみに「何か食べる物」はギリシア語でプロスハギオンですが、もともとはパンに添えて食べる副食の意味だそうです。新約聖書ではここだけに登場します。

共にいてくださるイエスさま

助祭だった頃、近くのプロテスタント教会の牧師先生と親しく交わらせていただいた。その先生は奥さまを亡くしたばかりだった。奥さまとの思い出の地を離れ、東京の教会へと赴任なさったのである。牧師館のリビングには奥さまの写真が飾られていた。そして、冷蔵庫には「ゴミ出しはこの日」と曜日がかかれた札が貼ってあった。そこには奥さまの名前も記してあった。お手洗いにも奥さまの名前が記された注意書きがあった。よく見るとあちこちにそんな札が掲げられていた。牧師先生の中では奥さまは生きておられたのである。日々の生活の中で、天国の奥さまからの呼びかけに耳を傾け、それに応えるようにして生きておられた。牧師先生と奥さまの間には少し難しい表現で「人格的な交わり」があったのである。

ある日、牧師先生がカトリック教会の司祭館にやってきた。コーヒーをいただきながら、お話を伺っていくと、最初はハッキリとはおっしゃらなかったが、とてもつらい様子だった。聞けば、教会員の方々から再婚するように迫られたとのこと。自分たちの教会の牧師が独り身であるのは世間体が悪いのだそうだ。泣きそうな顔をなさりながら語ってくれた牧師先生の姿を見て、牧者として生きていくことの厳しさをわたしは知った。奥さまが生きておられる。奥さまの呼びかけに支えられて生きている。そこに大きな喜びを感じ、倒れてしまいそうな気持ちを振り起こしながら牧師としての務めを果たしていたが、信徒たちはそうは見ない。自分のことを気にかけてくれる信徒たちのところを思えば、お見合いの写真を無下にお返しはできないのだろう。人と神さまとの間に立たされる牧者である。

今日の福音を読みながら、そんなことを思い出した。あの牧師先生はどうしているだろうか？